
このこのこ！～男の娘のこんな日常～

トミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

このこのこ！〜男の娘のこんな日常〜

【Nコード】

N7675Z

【作者名】

トミ一

【あらすじ】

私立天翔学園高等学校 この学校に入学したのは、どこにでもいるような男の娘！？

プロローグ 「主人公は××系」 (前書き)

不定期更新になりますが、よろしくお願い致します。それじゃあ主人公のアカリちゃんヨロシク。

「僕の名前は、アカリじゃないです。えーっと、このセリフ読めばいいですね。こほん、青春に必要なのは 「友情」 「ラブコメ」

「男の娘」 ……って僕は男の娘じゃないーい!!

プロローグ 「主人公は××系」

「月アカリさん好きですっつー！！付き合ってくださいっつー！！」

2011年 春 4月も終わりに近づき今年僕は、必死の受験勉強の結果無事合格した「私立天翔学園高等学部」の体育館裏に呼び出されて今まさに告白された。

「無理です。」それを僕はソッコーで断る。 「……………えっ？」

「それじゃあまた明日。」

僕は今告白断った田中太郎君（多分）の横を通り過ぎようとして「ちよつちよつと待つてください！」「田中太郎君（多分）に道を塞がれた。

「どっどうしてですか！？せめて理由いやっ少しでいいから考えてくれます」「無理です。本当に。」「僕は、さっき告白を断ったときより早く返事をする。」

「だからなんでっ」「落ち着いて、別にぼくは田中君のことを嫌ってないし嫌悪感すら持ってないよ。逆に友達になりましたよっつて言われたら嬉しいぐらいだし。」「じゃあ友達以上にみえないってこと？後、田中じゃなくて田代です。」「と田中君じゃなくて、ええっ」と田代君だ。は冷静にツツコミをいれながら聞き返してきた。

「いや…その…なんとというか…その」実は僕、この手の告白は中学生時代からなれている。しかし、理由の説明だけはどうしてもなれない。むしろ、ある意味なれたくない。

そう、僕、つきあかり月明狩
りゅうと竜人が

男だということに。

第一話 「幼馴染は狼系」

2011年4月26日(火)

「んーっ……ふう。」僕は自室で大きく背伸びをした。

「さ・て・と。」ピピッと鳴った携帯のアラームを素早く止めて、時間を確認した。

AM 4時30分

「よし、時間ぴったし。」これは僕の癖で、アラームが鳴る1分前には起きて背伸びなんかしたりして本格的に準備をしようとするものだ。

そして、なんでこんなに早く起きるかと言うと僕には色々仕事がある。

「今日のお弁当はどうしようかなあ。」僕は鼻歌を歌いながら、寝巻の上からポンチョを着てつぶやいた。

「セイヤはもう少しお肉食べたいって言ってたけど……栄養バランスかんがえとなあ。」

セイヤと言うのは僕の幼馴染でれっきとした女の子なんだけど……まあ説明は後にして、やることやんなくちゃ！

「んーと、昨日はハンバーグだったから少し焼かなかったあまりがあるから。うん、ピーマンの肉詰めにもするか。後他にも……」そんなことを考えながら、洗濯機のあるお風呂場に行く。

「その前に、洗濯物干さなくちゃ。」すぐに頭を昨日の天気予報に切り替える。確か今日は、晴れだったはず。一応テレビをつけて、確認する。……うん合ってた。

「お姉ちゃんは、またお昼過ぎに起きるんだよね〜冷めても美味

しいものって難しんだよね。」「軽くため息を吐く。

時間後、

）
1

「ふう。」「僕は、あさの仕事を一通りかたずけてココアを飲んでい
た。

「全く、セイヤはあれほど何回も注意してるのに下着を洗濯機に入
れるんだから。」「ぶつくさと文句言いながらココアを一口飲む。う
ん美味しい。

「僕だつて思春期の男子なのになあ。」「本当は狙ってやってるのか
な？ いやないか、そんなことしてもあまり意味ないしね。」

「多分もう無意識のうちにやってるんだろな。」「まあその理由も
わからなくわない。ふと、窓ガラスに写った自分の姿を見る。」

そこには、寝巻き姿の上にポンチョを軽く羽織った髪の毛長い綺麗な
美少女がいた。

「……………てゆーか、僕なんだけどね。」「はああああああ

ああ 口に出すとなお落ち込む。

そう、僕「月明狩竜人」つきあかり りゅうじんは見た目は完全に女の子だ。

この見た目のせいで、僕は大変な思いをしてきた。例えば、昨日の
田代君のような例 あれが一番困る。なぜなら、A君と言う人がい
たとする。A君と僕は普通に仲良くしているとする。同性なんだか
ら当たり前だろう？ それなのにA君は完全に僕のことを女の子だ
と思う。僕の通っている「天翔学園高等学部」てんしょうがく へんこうがくぶ略して、「テンガク」
はそれなりにマナーを守っていれば私服登校OKなのだ。僕は数少

ない制服組みで、この見た目との相乗効果でさらに目立ってしまう。しかし、この時代「ボーイッシュ」と言うような言葉もあるし、「ボクっ娘」と言うことももある。簡単に言ってしまうえば、僕を女の子と勘違いするのは当たり前というものだ。しかし、自分のほうから「僕は男だからね。」と言うのもなんかプライドみたいなものが許さない。そんなこんなで僕は、週2のペースで告白されてしまう。・・・男子から。ちなみに、僕の幼馴染が僕のことを「アカリ」と呼ぶのでよく本名を「月アカリ」と勘違いする人も多い。

「まあ、後数週間すれば僕が男だつてことが分かってくるだろうな。経験からして。」僕は、ココアを飲みきつてかたずける。今の時間は5時38分まだ時間はある。

「さてとお風呂にでも入ろつと。」僕はお風呂場に向かった。僕は、お風呂が大好きだ。細かく説明すると髪を洗うのが好きだ。そのため、特性リンスを作ったりして髪の手入れは欠かしたことがない。こうゆう所も、セイヤに女の子っぽいといわれるけど。好きなんだから、しょうがないしょうがない。

「ん〜んん〜んんん〜んん〜」僕は服を脱ぎ始めながら鼻歌を口ずさむ。そしてシャワーを浴び始めて、髪を洗おうとシャンプーに手をかけたとき・・・

「あつ」しまった、着替えを忘れてしまった。けど今脱いだ下着着るのもなあ。

「仕方ないか。」僕は、シャワーを止めて体と髪を軽く吹いてバスタオルを体に巻いて自分の部屋に戻った。

ガチャツとドアを開けたとき、ふと違和感があった。

「……………ベットが乱れてる。」それだけじゃない、下着をしま

つているタンスが少し開いている。さらにベランダの窓が開きっぱなしだ。洗濯物を干したとき鍵を締め忘れていたことはじつは多い、しかし学校に行く前わ必ず確認するので防犯に関しては大丈夫。だけど、窓を締め忘れるなんてありえない。そして決定的なのは……

「……は……あ……はあ……」

微かに聞こえる人の呼吸音しかもクローゼットから。

「……（ゴクリ）」僕は少し緊張しながらもクローゼットに手を掛け……思いつきり開けた。

そして……そこには……

「……」

「……何してんの……セイヤ」

「……ワン」

「……状況整理中。シバラクオマチクダサイ……」

目の前にいるのは「澄空星夜^{すみそらほしよ}」俺の幼馴染で通称セイヤ 一人称は「アタシ」

少し赤みがかったショートヘアで結構傷んでいる イメージとしては「犬系少女」というより「狼系少女」 胸はとても残念 セイヤの家は隣でベランダとベランダの間は1メートルも無いジャンプして渡れる距離だ しかもセイヤは成績と反比例するほどスポーツ万

能で「テンガク」にギリギリ合格したのも奇跡だと思う・・・
・・・うんだいたいこ
なもんかな。よし！！

「セイヤ」

「・・・なつなにアカリ」

「いくつか質問していい」

「うっうん」

「質問その1ベットが乱れてるけどなんで」僕は淡々と質問する。

「さっさあねえなんでだろうね！アハハハ」セイヤはわざとらしく笑った プチッ

「そう・・・質問その2・・・僕の下着をしまってるダンスが少し開いてるんだ。それでさあその手に持つてるの何？」僕は続けて質問する。

「あの・・・その・・・あー！ー！ーいつのまに！」セイヤは大げさに僕の下着を見てリアクションを取る。 プチッ

「じゃあね最後の質問いい」僕は冷たい声でセイヤに聞く。

「なつなに」セイヤは怯えた声で返事をする。

そしてきっぱりと僕は言う。

「死ぬ前に何か言いたいことある」

「……………」セイヤは凍りついた。

「さあ、早く」自分でも信じられないほどの怒りを抑えるの難しいから早くして欲しい。

「……………」分かった。アカリ聞いてくれ。」

「っ！ なつなに。」急に真面目になったな、もっもしかしてわざとじゃなくて何か理由があったとか

「……………」

「……………」

「……………」アカリってやっぱり大事な所隠すと百パーセント女の子だよな。」

「へっ!?!……………」あっ」今の自分はバスタオル姿と云うことを忘れていた。

「いや————!! 眼福 眼福」

「……………」

「ブツチン

「えっ、今の音」死ね——————
——————この変態オオカミ——————
「っ」僕は机の上の分厚い参考書を思いつき叩きつけた。

「ウォーレン」

第二話 「運命の少女は毒舌系」

2011年4月26日（火）

「すいませんでした!!」セイヤが土下座している。

「知らない!!セイヤなんてもう知らない!!」僕は、自分でも分かるぐらい目に涙を貯めて起こっていた。

・・・あつ、ちなみに土下座してるほうがヒロイン（一応）で怒ってるほうが主人公（一応）です。普通逆だと思っけれど、まあ色々あるんです。

AM7時03分

セイヤに一撃くらわせた後、さすがにやりすぎた・・・とは思わず。とりあえず僕の部屋にセイヤ改めこの犬っころを置いておくとまた何かされそうなので、ロビングのソファに放置していた。それ約1時間後セイヤが復活した。

そして、第一声が「うーん、よく寝た。さてアカリの部屋あさりに行くか。」んで、直後僕がいることに気がついて僕とのやり取りを思い出して、冒頭のシーンにつながる。

「なんで起きたら僕の部屋をあさりに行くんだよ!」

「本当にごめん!」

「知らないったら知らない!」

「とりあえず、お願いだから朝ごはん作って!」

「今言っことかー!っ!!!」

「だって、アカリがアタシの分の朝ごはん作ってくれないんだもん!」

「今そんな話してないでしょう?!」

「じゃあ、なんの話？」

「だ〜か〜ら〜!!! はあもういいや。「怒り疲れてどうでもよくなってきた。」

「じゃあ、朝ごはん作ってくれる?」この犬っころ。

「罰として朝ごはん抜き!!」

「ワオーーーーーー!!」

ここまでの状況説明・・・朝から飼い犬のしつけをしています。

「クウン クウン」

「全く、なんであんないたずらするかな本当に。」

「ワン?! ワンワンワンワンワン」

「落ち着け、完全に犬化してるぞ。」冷静に突っ込む。

「スーハーハー・・・あーあーよし戻った。アカリさ、一応アタシ高一女子なんだよ!」深呼吸で戻るんだ。

「だからなに。」

「いやいやいやいや!だから・・・その・・・なんでそんなことしたかを聞かない?」

「うーんそういえば、じゃあなんで?」

「えっ!!!」

「えっ、じゃないでしょう。朝忙しい時にあんなことして、何か理由あるんでしょう?ほら行ってご覧もう怒らないから。「第一聞けと言ったのはセイヤのほうだ。」

「いや・・・その・・・だから・・・あたしは・・・あなたが・・・すく (ぐびぐびぐびぐび) なっなに」

「あつ時間だそろそろいかないと遅刻しちゃう。行くよセイヤ。」携帯のアラームを止めて言う。

「えっいやまだ理由言っていないし、着替えてないし、何より朝ごはんは?」

「だからないよ。」

「ウォーリーーーン」

「先行くよ。」

「ワンワンワンワン」

「いってきまーす。あつ鍵いつもの植木鉢のしたにあるから。きちんと戸締りよろしくね。」そう言い残し駆け足で家を出た。

「ワンワン」
「ボタン」さて急ぐか。

「テングク」は大通りに出れば、直線で距離もそんなに無い。しかし、その大通りにでるには僕の家と「テングク」の位置の関係上逆方向にそこそこの道を歩かないといけないのだ。そこで僕は・・・

「仕方ない、時間ないし」
「暗闇くやみだんじつ通り」を通るか。「暗闇通りと言うのは、学生などが遅刻しそうなときに使う裏道だ。ビルと雑木林に挟まれていて、いつも暗いのでその名が付いた。学校側はひったくりなのが多い・不審者が出るなどの理由で通ることを禁止しているが、背に腹は変えられないのでその通りを使うことにした。」

「ここが暗闇通りか確かに暗いな。」実は僕この暗闇通り使うのは初めてである。

「なんせいつもは、余裕をもって家から出るもんな。」ちなみにセイヤはいつもギリギリでこの暗闇通りの常連らしい。後、セイヤのご飯はいつもはきちんと作ってはある。

「飯抜きは少しひどかったかな？」ふと、走りながらそんなことを考えていた。

「いやいや、あんぐらい当然だよ全く。」あんないたずらするなんて。

「そついえば、いたずらの理由なんだったんだろっ?。」まあいいか。

そして暗闇通りを4分の3ほど通り過ぎたかなと考えていた頃。いきなり後ろから声をかけられた。

「おい！そのねえちゃん！」・・・無視して走る。

「お前だよ、その学生服のお前！」・・・はあ、分かっているけどやっぱ僕か。

「・・・なんですか。」動かしていた足をとめて後ろを振り向くと、どこにでもいるような。したっぱAみたいなおじさんがいた。「ちよつと、金貸してくんないかんあ。困ってんだよ。」うわあ、ひくぐらい典型的なカツアゲのセリフだな。後、カツアゲするやつは性別ぐらいきちんを見極める。

「・・・残念ながら僕お弁当派なんで、購買用のお金すら持って無いですけど。」

「んじゃあ、手間が省けたな。」

「はっ?。」

「金が無いんじゃしょうがねえ・・・体で払ってもらおうか。」パチンとしたっぱAが指を鳴らすと雑木林から7人ほど似たような奴らが出てきた。そして最後に、がたいのでかいグラサンをかけたいかにも「一番強くて偉いですよ」オーラを出したボスみたいな人が出てきた。

「あゝなるほど、そうゆうことですか。」

「そうゆうことだよ、ねえちゃん。物分かりいいじゃないか。」したっぱAに代わってボスっぽい人が口を開いた。

「そうですか。・・・つまりここに居る皆さん僕のストレス発散に付き合ってくれる。・・・そういうことですね。」僕は少し笑顔でいった。

「」「」「」数秒の沈黙。

「ククク・・・あつはっはっはっはっはっは」ボスつぽい人が笑い、それに続くようにしたっばたちも笑い出した。

「馬鹿かお前、恐怖で頭おかしくなったのか？」

「いえ、全然」

「あつ！！」少しキレた様子で声を上げる。

「第一僕は、結構頭の良い学校でそこそ上位常連組なので頭は良いほうですよ。」

「そうゆうこといつてんじゃ・・・あゝなるほど。」

「どうかしましたか？」

「残念だがその手にや乗らねーよ。お前俺様の直感だが格闘技かなんか出来るんだろう。」

「ええっ・・・まあ・・・そこそこ。」意外に鋭いなボスつぽい人。

実は僕父親が格闘家で一応基礎は小さい頃叩き込まれた。

「つまり、お前は複数対一人でもズブの素人の集団にやられるわけないと考えているんだな。」

「ええつと・・・近からず遠からずですかね。」

「残念だったな、俺たちは素人じゃねんだよ。俺たちは全員格闘技経験者だ。」

「あつそうですか。」そろそろボスつぽい人の説明あきたなあ。

「さらに教えてやるよ、俺の通り名を。」

「通り名？」そんなもんあんのか意外に強いのかもしれないなこのボスつぽい人。

「俺の通り名は「月の狩人」だ！」

「・・・」

「どうだ驚いたか、あの伝説の不良は死んでなんかつたんだよ。」

ちなみに簡単に説明しておく。「月の狩人^{つきかりゆっぴ}」と言うのは、2年前1年しか活動しなかったのにこの街の不良・ヤザ・指名手配犯などの無法者達を問答無用で病院送りにし突然姿を消した死亡説もある伝説の不良だ。

「……………」

「どうした、驚きすぎて声もでなくなっただか。」

「あの、言わずらいんですけど。」

「なんだ？」

「あなた「月の狩人^{つきかりゆっぴ}」じゃないですよ。」

「なっなんだとー!!」

「だって……………」

「そう、そのとつりだ黒髪意外ブス女！」

「だっ誰だ。」うん、確かに誰だ今俺しゃべってたし黒髪は認めるけど女じゃねえし。それ以前に、とんでもないこと言わなかったか？

そんなことは露知らずカツアゲグループに割り込んできたそいつは間髪いれずに話し続けた。

「いいか「月の狩人^{つきかりゆっぴ}」はてめーみたいな××が小さい代わりに凶体でかい 野郎じゃなくてそこの黒髪意外ブス女より少し小さくてそこの黒髪意外ブス女の真逆の色でてめーみたいな 野郎の色

の髪とは比べ物にならないほど綺麗な白髪で爪はてめーみたいな 野郎の豚足とは比べ物にならないくらいとても鋭く大きく美し

んだよこの「ピーーーーー」で「ピーーーーー」な「ピーーーーー」
「……………」が
分かったら「ピーーーーー」しながらとつとと帰れ「ピーーーーー」

「……………本当です。」

「……………」

「……………」

「そうかじゃあな。」

こうして僕はセイヤが来るまでその場に立ち尽くして、一緒に遅刻した日。

僕は出会った 出会ってしまったんだ。

曇日陽射くもひようせつというある意味運命で結ばれた女の子に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7675z/>

このこのこ！～男の娘のこんな日常～

2011年12月26日00時46分発行